

主催者のふるしき

東京都知事

Yuriko Koike 小池百合子

Mottainai Furoshiki もったいないふるしき

私が環境大臣だった当時、気候変動対策や自然保護に加え、循環型社会の構築が主な課題でした。循環型社会の構築といっても、具体的な行動を起こさなければ大きな社会的変化にはつながりません。そのため、「もったいない」というコンセプトを社会に広げるために、日本の伝統である風呂敷に注目しました。私は江戸時代の絵師である伊藤若冲の絵に魅せられていたことから、若冲の作品をモチーフにした風呂敷を作りました。



パリ市長

Anne Hidalgo アンヌ・イダルゴ

Fluctuat nec mergitur たゆたえども沈まず

1358年以降、パリ市の紋章は「波に打たれても、沈むことのない」船で表されています。パリにとってセーヌ川は、制御されてはいても自然の要素であり続け、首都を横断する自然の回廊です。常時監視下にあり、洪水を抑えるために河川の流れを上流で管理しています。また、セーヌ川岸は暮らし、仕事、そして交流の場であり、1991年以来、ユネスコによって世界遺産に指定されており、現在はすべての人に開放された都市公園でもあるのです。



©Pauline Sauvage – Ville de Paris



ゾーン1：「ふるしき」の由来と物語

ふるしきの由来の紹介

ふるしきの起源は8世紀に遡り、風呂場の着替えのために敷いて衣服が濡れないように包み、持ち帰るところから、その呼び名がつくようになったと云われています。それ以来、ふるしきは日本の生活から伝統の美意識までが表現され「包む」「結ぶ」「贈る」という最もシンプルな使い方が、日本文化のおもてなしの心を育んできました。

ゾーン2：「ふるしき」の美とサイクル・オブ・ネイチャー

日仏のアーティストのデザインによるオリジナルふるしき展示

21世紀に入り温暖化や気候変動、エネルギー問題などが深刻化し、地球環境に大きな異変が起こりはじめました。また我々の消費生活がさらに進んでいくなかで、自然の循環をより深く理解することが、人類の未来においてますます必要不可欠になってきたと言えるでしょう。

この度「FUROSHIKI PARIS」では、ふるしきが世界で最初のエコバッグであることを伝えると共に、この生活の美を広めるため、「サイクル・オブ・ネイチャー」（自然のサイクル）をテーマとしたオリジナルふるしきを現在日本とフランスで活躍するアーティストやデザイナーの方々にデザインして頂きました。自然の循環や生命の変容、また今回パヴィリオンにも採用された唐草文様という伝統的なモチーフを使うなど、自由な表現でふるしきがデザインされました。日仏のアーティストの環境に対する集合的なメッセージが来場者に伝わることで、地球の未来を共に考えることに繋がればと願います。

Jean Paul Gaultier ジャン ポール・ゴルチエ

Flours du ciel 空の花

ジャン ポール・ゴルチエは1952年にパリの郊外で生まれ、1970年、18歳のとき、ピエール・カルダンのもとでファッションデザイナーとしてのキャリアを築き始めた。デビュー以来、ゴルチエはあらゆるものの美を明らかにしてきた一保存用の缶詰といったもっとも見慣れた物でさえも、美しさと機能性を備えられるとし、宝石や香水用の小箱に昇華させた。

このふるしきは、人生の美しさや豊かさを象徴する光に包まれ、海原に咲き乱れる花々を表している。



©Jean Paul Gaultier

Yayoi Kusama 草間彌生

Once the Abominable War is Over, Happiness Fills our Hearts いまわしい戦争のあとでは幸福で心が一杯になるばかり

前衛芸術家、小説家。幼少より水玉と網目をを用いた幻想的な絵画を制作。1957年渡米、巨大な絵画、ソフトスカルプチャー、鏡や電飾を使った環境彫刻を発表。1960年後半にはボディ・ペインティング、ファッション・ショー、反戦運動など多数のハプニングを行い、映画制作や新聞の発行などメディアを使った表現にも着手。独創的な作品と活動はアート界に衝撃を与え前衛芸術家としての地位を築く。1973年の帰国後も国内外で作品を発表し、世界各地で野外彫刻を展示。2003年フランス芸術文化勲章オフィシエ受勲。2016年文化勲章を受章。2017年に北米巡回個展がハーシュホーン美術館(ワシントンD.C.)より始まり現在も巡回中。今も精力的に制作を続け、全世界を飛び回り活躍中。

「細心と奔放、緊張感と自由、静寂と喧噪。顕微鏡的なミクロコスモスと宇宙的なマクロコスモス。相反するものを兼ね備えたこの作品は、無限のパリエーションを奏で、色彩が画面を超えて発光する。それらは、生きる、愛せ、恐れるな。自由であれ、と語りかけてくる。この風呂敷を通して、私の生涯を支えてきた命の限りの創造のエネルギーを感じていただけたら幸せです。」



©YAYOI KUSAMA

Takeshi Kitano 北野武

Oobora おおぼら

1947年東京都足立区生まれ。コメディアン、俳優、映画監督。浅草フランス座で芸人修行中に知り合ったきよしと漫才コンビ「ツービート」を結成。漫才ブームで一躍人気者になる。その後、ソロでテレビやドラマ出演、映画の世界などで活躍。映画監督・北野武として世界的な名声を博す。1997年、映画「HANA-BI」でベネチア国際映画祭、金獅子賞を受賞。最新作「アウトレージ 最終書」。2016年レジオン・ドヌール勲章オフィシエ(フランス)、2018年旭日小綬章を受賞。

「深海の魚、アンコウ(Lophifmus setigerus)をモチーフとしました。アンコウは特種な生態の生き物です。(詳しくはお調べください!) その大きな口で丸呑みにして捕食する姿=(風呂敷のつつむ)というイメージがこの作品に。」



©TAKESHI KITANO

Morihiro Hosokawa 細川護熙

Daruma 達磨

1938年、東京生まれ。朝日新聞記者を経て、衆参議員、熊本県知事、日本新党代表、内閣総理大臣を歴任。政界引退後、神奈川県湯河原の自邸「不東庵」にて陶芸を始める。現在は作陶のほか、書、水墨、油絵、漆芸、襖絵なども手がける。

「江戸時代の有名な禅僧白隠禅師(1686年-1769年)のよく知られた《達磨図》。その禅画を油絵で描いたら面白いだろうと描いてみたものです。青や黄色の絵具の迫力が水墨の表現とは全く違う狙い通りのものになりました。ただ髭のところだけは、かすれた感じを出すため、荒い筆を使って墨で描いています。日本画は平面的で、私には物足りない印象がありますが、油絵はタッチもいろいろ楽しめるし、皿や紙など画材も工夫できますから。」



Suzanne Lafont スザンヌ・ラフォン

Borago Officinalis ポラゴ・オフィキナリス

スザンヌ・ラフォンは写真を用いるアーティスト。文学と哲学を学び、言葉やその状況設定に関心を持ったラフォンは、80年代の終わりに美術表現のなかでその探求を進めることにした。最近の作品では、植物の世界を舞台にした劇作上に、非人間の「人物」を登場させる。また、その写真技法はドキュメンタリーのそれではなく、ユーモアと不合理によるものである。

《ポラゴ・オフィキナリス》には、都会の真ん中で採取された野生の花(または野生に戻した花)が、何らの文脈も伴わずに表現され、45倍に拡大されている。



©Suzanne Lafont

Jean-Michel Othoniel ジャン=ミシェル・オトニエル

Dans le secret des nœuds 結び目たちの秘密の中に

ジャン=ミシェル・オトニエルは1980年代の終わりから、彫刻、デッサン、インスタレーション、写真、文筆、パフォーマンスまで、さまざまな表現を通じて独自の世界を作りだしてきた。

オトニエルの「結び目」への執着は、無限の反復をしめす数式や、ラカンの論理に対する考察から生まれた。ラカンは「結び目」に関するトポロジー(位相幾何学)で、三次元を、精神分析空間の位相構造として空想、象徴、現実という観点からまとめている。オトニエルもまた、作品の中で、肉体的・意味論的な複数の現実を一緒に結び合わせている。オトニエルは未開の結び目や、海洋技術で使われる結び目、日本の縛り文化も賞賛する。結び目は、オトニエルがふるしきに結び目を表現した彫刻の写真を再構成し、また、そのふるしきが不特定のものを包むときにも現れる。このさらに結ばれた結び目は、マルセル・デュシャンによる《秘められた音に》の謎について問いかけるだろう。こうして、オトニエルはふるしきのタイトルを「結び目たちの秘密」とした。

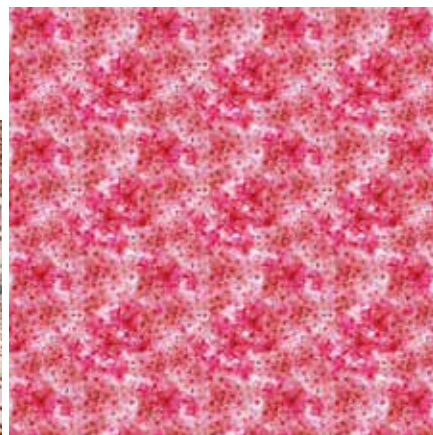


©Jean-Michel Othoniel, ADAGP

Mika Ninagawa 蜷川実花

Sakura (fleur de cerisiers) 桜

写真家、映画監督。木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。映画『さくらん』(2007)、『ヘルター・スケルター』(2012)監督。映像作品も多く手がける。2008年、「蜷川実花展」が全国の美術館を巡回。2010年、Rizzoli N.Y.から写真集を出版、世界各国で話題に。2016年、台湾の現代美術館(MOCA Taipei)にて大規模な個展を開催し、同館の動員記録を大きく更新した。2017年、上海で個展「蜷川実花展」を開催し、好評を博した。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事就任。www.ninamika.com/
 「2011年3月、今年の桜を撮りたかった。私が私であるために、自分で自分を支えるために。目の前の現実と向き合う準備、そしてほんの一瞬の気分的な逃避。映画や漫画のような非現実の世界が私達の日常に、その異常な日常に日々慣れていく自分。何かに取り憑かれたように撮影した一週間、撮影枚数2500枚。ソメイヨシノ、八重桜、枝垂れ桜、桃の花、木瓜、いつもと変わらず咲き誇る春の花。眩しいくらいの変わらないその光景。美しすぎるこの光景を忘れる事はないだろう。目を閉じて、ゆっくりと深呼吸をする。私はこのスタートラインから、私達の新しい日常をしっかりと生きる。日本はこんなにも美しい。」



©mika ninagawa

Jean Jullien ジャン・ジュリアン

Sans titre 無題

ジャン・ジュリアンは、ロンドンのセントラル・セントマーティンズとロイヤルカレッジ・オブ・アートで学んだフランス人グラフィックデザイナー、イラストレーター。一貫性のある表現と同時に幅広い関心が見られるその創作は、イラスト、写真、ビデオ、コスチューム、インスタレーション、書籍、ポスターや洋服など多岐に渡る。

「私が描きたかったのは、自然というものを象徴的に見たときの(少し素朴ではありますが)人間と樹木との間にある、観念的に何かロマンティックさを感じる親密な関係です。今回のデザインは、こういった両者の中にある物語のほんの一部をモチーフにしています。」



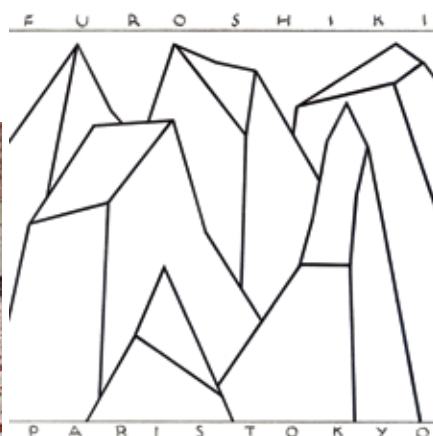
©Jean Jullien

Philippe Weisbecker フィリップ・ワイズベッカー

FUROSHIKI フロシキ

フィリップ・ワイズベッカーは1942年セネガルのダカールで生まれた。3歳で家族と戻ったフランスで就学。国立高等装飾美術学校の学位を取得したワイズベッカーは、チュニジアでグラフィックデザイナーとしての仕事を開始する。68年にニューヨークに移住、のちにインテリアデザイナーとしても活動し、70年からは本格的にイラストレーターとしてのキャリアを開始。20年間、ニューヨークタイムズ紙、タイム誌、ザ・ニュー Yorker誌、ル・モンド紙ほか多くの主要プレスと仕事をしてきた。現在はアーティストとして主に自分の作品を制作している。

「私は特に、日常生活にあるものを描いています。日仏間の記念すべき年に“サイクル・オブ・ネイチャー”をテーマにふるしきのデザインを依頼された当初、それほど明確なアイデアがなかったのですが、その数ヶ月前に私にしては珍しいテーマとして山の作品シリーズを制作したことを思い出しました。雪のように真っ白な背景の上に重なる、黒くしっかりしたラインで描かれるイレギュラーな多面体で構成された私の山々たちは、冬という季節のサイクルを表現するのに適しているように思えたのです。」



©Philippe Weisbecker

Setsuko Klossowska de Rola クロソフスカ・ド・ローラ節子

Union de motifs japonais et français – Chintz du Japon et Toile de Jouy 日仏絵合わせ 和更紗と「インディアン」

クロソフスカ・ド・ローラ節子は、スイスとパリを拠点に活動する画家、陶芸家および文筆家。ユネスコの平和アーティストであると同時に、バルテュス・アトリエ・アソシエーションの代表もつとめる。

「インドの布模様は、その柄の多様性と豊かな色彩の美しさで、何世紀にも渡り世界を魅惑し続けています。日本には古代から伝わっており、室町時代にポルトガル人により舶載され、和更紗という名で独自の発展をとげました。フランスにも15世紀、ポルトガル、英国、オランダ人により『インディアン』と呼ばれる大量の布が持ち込まれました。今回、フランスと日本を結ぶ展覧会を記念して、同じインドを源流として、それぞれの国の伝統文化の趣向と情緒を籠めた二国の美しい柄を混ぜ合わせたふるしきをデザインしました」



©Setsuko Klossowska de Rola

Jean-Michel Alberola ジャン＝ミシェル・アルベロラ

Astronomie populaire アストロノミー・ポピュレール

ジャン＝ミシェル・アルベロラは1953年アルジェリアのサイダ生まれ、現在はパリを拠点に活動。30年以上ものあいだ変幻自在な作品をつくり続け、その手法は具象、抽象からコンセプチュアル・アートにまで及ぶ。グワッシュ、ネオン、彫刻、アートブックや映像など異なる様相を見せる一つの作品が、美のはかなさ、見つめることの曖昧さ、アーティストの役割やアートの終焉といったテーマについて問いかける。政治や社会問題を積極的に扱うアーティストとして、アルベロラはそのユーモアや詩的な表現でそれら問題を芸術的に考察する。

「天文物理学は、いわゆる自然と呼ばれるものの一部だろう。私が言いたいのはそれだけだ。」



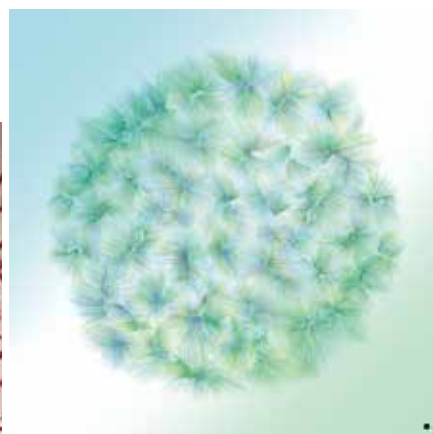
©Jean-Michel Alberola

Constance Guisset コンスタンス・ギセ

Tampopo たんぽぽ

フランス人デザイナーのコンスタンス・ギセは、プロダクトやインテリアデザイン、展覧会などの空間構成を行うスタジオを2009年に設立。変化や繊細さ、おどろきに対する感性を大切に、人間工学に基づいた軽やかで、生き生きとした、人々を迎え入れるようなオブジェクトをつくりだす。

今回FUROSHIKI PARISのためにギセはたんぽぽを描いた。「緑の瞑想的なライン。連続するクレヨン筆致。単彩画のヴァリエーション。綿毛が飛んで種を蒔く。風が描いたデッサン。遠心力。たんぽぽは永遠に咲き続ける。」



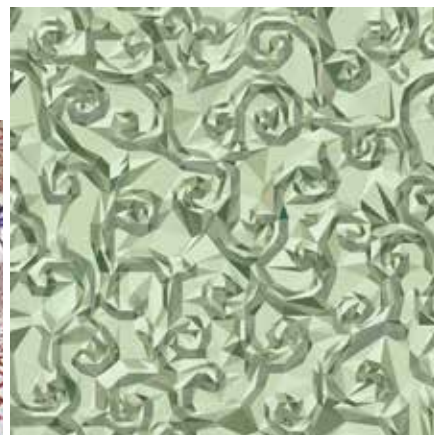
©Constance Guisset

Kohei Nawa 名和晃平

Polygon-Karakusa Polygon-Karakusa

彫刻家/SANDWICH Inc. 主宰/京都造形芸術大学教授。1975年生まれ。京都を拠点に活動。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2009年、京都に創作のためのプラットフォーム「SANDWICH」を立ち上げる。独自の「PixCell」という概念を軸に、様々な素材とテクノロジーを駆使し、彫刻の新たな可能性を拓いている。近年は建築や舞台のプロジェクトにも取り組み、空間とアートを同時に生み出している。2018年、ルーブル美術館にて大型彫刻作品 “Throne” を展示。

「日本で伝統的に使われている唐草模様をポリゴン化した。」



Kohei Nawa

Annette Messenger アネット・メサジェ

Les Utérus fleurissent sur les Furoshiki ふろしきに咲き誇る子宮

1943年にベルク=シュル=メール(パド=カレ県)で生まれる。1970年代より、アネット・メサジェの作品は日常生活のなかに宿る美に寄り添い、女性の体や心まつわるクリシェを巧妙にあつかう。また、メサジェは、政治や社会的なテーマを扱うように、私的な道理についてもその作品で表現してきた。

「女性ホルモンの周期は、月の満ち欠けと関連がある。それは、自然が女性に与えた特別な贈り物。また、『人生の節目』とも関連している。私は、いくつもの子宮を花瓶の花のように描いてきた一ちょっと毒のある花だけれど...花は、植物の生殖に必要な器官をそなえていて、自然のサイクルを維持するのに必要不可欠なものである。」



©Annette Messenger

Hiroko Koshino コシノヒロコ

Sumi no kiseki (Trace d'encre) 墨の軌跡

大阪、岸和田市生まれ。文化服装学院在学中よりキャリアを重ね、東京、大阪、パリ、ローマ、上海などでコレクションを発表。婦人服のほか、ライフスタイル関連、紳士服など、数多くのファッションアイテムのデザインを手がけている。近年はアーティストとしても精力的に活動、自身の作品を発表するスペースとして2012年銀座に、2013年には芦屋に、KHギャラリーをオープン。1997年第15回毎日ファッション大賞、2001年大阪芸術賞受賞。

「多様な表現が可能な墨。コシノはその特性を活かし、一枚の作品の中でも様々な墨の表情を作り出します。流れる直線、押しつけられた滲み、そして解放された自由な飛沫。シンプルでありとてもモダンな表現として、コシノはこの黒と白のコントラストを描き続けています。また、風呂敷として包まれた図が広げられたときに見せる表情の変化も、シンプルさ故の驚きがあります。」



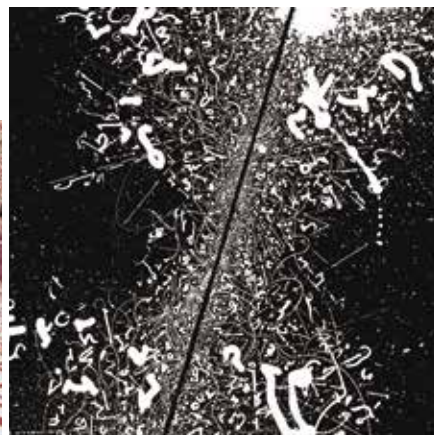
©Hiroko Koshino

Hiraku Suzuki 鈴木ヒラク

Constellation Constellation

アーティスト。1978年生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了後、シドニー、サンパウロ、ロンドン、ニューヨーク、ベルリンなどの各地で滞在制作を行う。ドローイングと言語、時間や空間との関係性を主題に、平面、インスタレーション、彫刻、パフォーマンス、映像の制作を展開し、描く行為の新たな可能性を探求し続けている。先鋭的な音楽家や詩人らとのコラボレーションなど領域横断的な活動も数多く行う他、2016年よりドローイングの新しい実践と研究のためのプラットフォーム『Drawing Tube』を主宰。著書に『GENGA』（河出書房新社/アニエス・ベー、2010年）などがある。

「(この作品では、)紙を薄墨で染めることで、まず茫漠とした空間としての背景をつくり出す。そこに光を放つように、シルバースプレーの飛沫やシルバーマーカーによる点や線を配置していく過程によって全体像が形作られる。それは、偶然と意図、イメージとテキストの間の綱渡りの中で新しい記号(サイン)を発見していくジェスチュアの集合体であり、架空の星座を作り出すような試みの痕跡とも言える。」



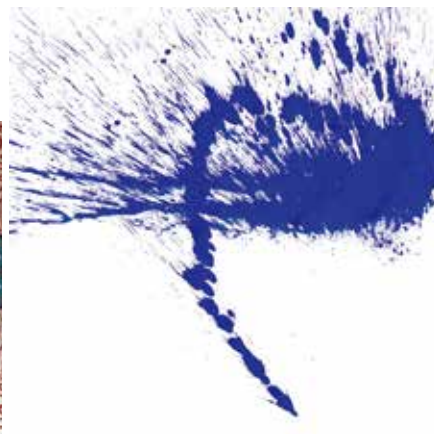
©Hiraku Suzuki

Kashiwa Sato 佐藤可士和

DISSIMILAR DISSIMILAR

クリエイティブディレクター。慶応義塾大学特別招聘教授。博報堂を経て「SAMURAI」設立。主な仕事に国立新美術館のシンボルマークデザイン、ユニクロ、楽天グループ、セブン-イレブンジャパン、今治タオルのブランドクリエイティブディレクション、「カップヌードルミュージアム」「ふじようちえん」のトータルプロデュースなど。近年は文化庁・文化交流使として日本の優れた商品、文化、技術、コンテンツなどを海外に広く発信していくことにも注力している。

毎日デザイン賞、東京ADCグランプリほか多数受賞。著書「佐藤可士和の超整理術」(日本経済新聞出版社)ほか。<http://kashiwasato.com/>
「偶然と必然、動と静、一瞬と永遠、大胆と繊細、混沌と静寂、曖昧と明快、過去と未来、伝統と革新など、さまざまな相反する要素が内包されている。流動的なエネルギーや形を持たない力が、佐藤可士和を通して放たれる筆の勢いによって、時間を切り取られたように一瞬で紙や布など様々なメディアに定着され永遠のイメージとなる。筆は紙に決して触れず、動力と重力によって描かれるこの作品は言わば筆跡のないドローイングであり、目に見えない自然の力が鮮やかに可視化された作品である。」



Kashiwa Sato

Nicolas Buffe ニコラ・ビュフ

Nature étendue 拡張された自然

ニコラ・ビュフは1978年パリ生まれ、2007年より東京在住。ヨーロッパの古典美術と日本や米国のサブカルチャーとを融合させた独自の作風で知られている。

『サイクル・オブ・ネイチャー』をテーマにこの作品を作る前、サイクルの限界というテーマについて私なりに自由に想像してみました。

何千年もの間、人為的な介入なしに自然は「自動的に」機能をしてきました。最近では人工知能などの様々な技術の驚異的な進歩により、私たちが自然として知覚する限界の概念が変わり始めているように感じます。そして、自然とバーチャルの境界がますます曖昧になっているように感じた私は今回、バーチャル・シンガーの初音ミクを題材にドローイングを描いてみました。彼女とその現象をバーチャル世界に拡張した『自然』と考えるならば、バーチャルな存在が自然に(逆)循環する日がいつか来るのでは…?」



©Nicolas Buffe ©Crypton Future Media, INC. www.piapro.net

agnes.b アニエス・ベー

Furo"chic" ! フロ"シック" !

今日もファッションデザイナーとして、アニエス・ベーはそのエレガントで時代や流行を超えた洋服で、パリを始め世界的に影響を与え続けている。

アニエス・ベーのふるしきは、近年なくなりつつある郵便の消印をインスピレーションにデザインされた。波に囲まれた紋章に、彼女のモットーの一つである“b. green!”と、東京タワーとも思わせるようなエッフェル塔を描いた。波は日本とフランスのあいだに広がる大海を表し、また2つの矢印は、東西に向かって旅人を運び日仏間の交流を生み出す風を示している。アニエスのふるしきはまた、草の上に広げてピクニックをしたり、単に寝転がって雲の行方を眺めて過ごしたりするのに私たちを誘っている。



©agnes. b

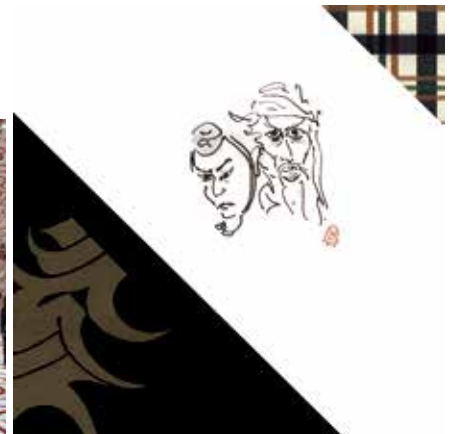
Hakuo Matsumoto 松本白鸚

Prospérité (coexistence – résonance) 共存共栄

本名藤間昭暁。屋号高麗屋。昭和二十一年五月東京劇場『助六曲輪江戸桜』の外部売の伴で二代目松本金太郎を名乗り初舞台。昭和二十四年九月東京劇場『逆櫓』の遠見の樋口で六代目市川染五郎を襲名。昭和五十六年十一月歌舞伎座『勳進帳』の弁慶ほかで九代目松本幸四郎を襲名。父八代目幸四郎(初代白鸚)から父方の祖父である七代目幸四郎、母方の祖父である初代吉右衛門の芸を継承し、当代独自の芸風を確立。立役として幅広い分野で数々の当り役を持つ。

なかでも『勳進帳』の弁慶は屈指の当り役のひとつであり、平成二十二年八月には、十六歳の初役以来、五十二年をかけて、全国四十七都道府県で上演するという偉業を達成。一〇〇〇回公演は東大寺大仏殿前にて奉納上演した。その上演回数は一一〇〇回を超え、今なお記録を更新し続けている。平成三十年一月歌舞伎座『寺子屋』の松王丸ほかで、二代目松本白鸚を襲名した。

「私は、歌舞伎の家に生まれ、3歳から歌舞伎を修行するかたわら、「アマテス」のサリエリ、「ラ・マンチャの男」等を演じてきました。今なお「勳進帳」の弁慶役と「ラ・マンチャの男」のセルバンテス、ドン・キホーテ役を其々1100回以上、演じ続けてる身として、感謝と希望を込め、弁慶の衣裳をモチーフにその二つの世界のpour prospérer を描きました。」



画・デザイン：二代目 松本白鸚

Kanako Kinutani 絹谷香菜子

Grue dansant tel le dieu du vent 風神舞鶴図

1985年 東京に生まれる。2007年 多摩美術大学絵画科日本画 卒業。2009年 東京藝術大学大学院美術研究科博士前期過程 芸術学美術教育研究室 修了。2011年 吉野石膏美術財団在外研修員としてロンドンに渡英。2013年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術教育研究室 満期退学。個展、グループ展多数開催。

「春から秋に現れる花や虫たちが鶴の羽ばたく風に乗って飛んでいる姿を描きました。鶴の姿は俵屋宗達の「風神雷神図屏風」に影響を受けています。可憐でありながら優雅で力強く風を司る神として、鬼ではなく、長寿や夫婦円満の象徴である縁起の良い鶴を選びました。

どこにでも手軽に持ち運べる風呂敷は「用と美」の要素を兼ね備えている大変優れたものでもあります。風呂敷を広げた時に軽やかな風が起る様に、四季の彩りと幸運を運ぶ風呂敷になればと幸いと思い制作しました。」



©KANAKO_KINUTANI

Shishu 紫舟

L'oiseau de feu 火の鳥

書家/アーティスト。幼少より書や日本舞踊などの教養を身につけ、書家となってからは奈良・京都で幅広く伝統美術の研鑽を積む。2017年の美術館での紫舟展にて、天皇皇后両陛下をご案内。2014年のパリ・ルーヴル美術館地下会場、フランス国民美術協会展において金賞と審査員賞金賞を受賞。2015年のイタリア・ミラノ国際万博 日本館のアートワークを担当、国際万博初の金賞受賞。世界へに向けた日本の文化と思想の発信をつづけ、文字が内包する感情や理を表現するその作品は、書の領域を超えた現代アートとして評されている。

「火の鳥は不死鳥と呼ばれ、永遠に生きると信じられている。私が扱う言葉は、一瞬で消え去るようにみえる。しかし放たれた言葉は、波紋のように拡がり、発した人が立ち去ってもなお生きつづけ、影響を与えていく。そのことばに宿る魂を「言霊」とよぶ。魂は文字にも定着させることができる。筆を用い、高い精神性で、文字に命を宿す、それが日本の『書』。本作は、永遠に生きる不死鳥の力に、日本の書が命を与える。」



Asao Tokolo 野老朝雄

Piecing Pieces Pattern FUROSHIKI PPP 風呂敷

アーティスト。1969年東京生まれ。幼少時より建築を学び、江頭慎に師事。2001年9月11日より「繋げる事」をテーマに紋様の制作を始め、美術、建築、デザインの境界領域で活動を続ける。単純な幾何学原理に基づいて定規やコンパスで再現可能な紋と紋様の制作や、同様の原理を応用した立体物の設計/制作も行なっている。主な作品に、大名古屋ビルヂング下層部ファサードガラスパターン、東京2020オリンピック・パラリンピックエンブレム、大手町パークビルディングのための屋外彫刻作品などがある。2016年～ 東京大学工学部非常勤講師、東京造形大学客員教授 2017年～ 筑波大学非常勤講師。

「現代の唐草紋様」として長年制作を続けている、「野老紋/ PPP TOKOLO PATTERN」。4種類の柄の正方形を64個使用し、組み合わせ方によって何億通りもの紋様が描ける仕組みから、風呂敷のために描き出した1柄です。見る人によって様々な「見立て」が可能なのが、幾何学紋様の魅力ではないでしょうか。「海の生物」「鳥」「渦巻き」など…風呂敷の中に、あなたは何を見つけましたか？」



©ASAO TOKOLO

Rune Naito 内藤ルネ

Tokimeki ときめき

イラストレーター、人形作家、デザイナー、エッセイスト……。1950～1960年代にかけて、圧倒的な人気のファッション誌「ジュニアそいゆ」の表紙と挿絵を担当し、大ブレイク。ヴィヴィッドに彩られたキッチュな少女画で古い美少女観をひっくり返し、動物から野菜、フルーツ、そして捨てられていた家具まで、それまで誰もが見てこしていた「カワイイの芽」を家具や食器、ルームアクセサリー等あらゆるものの中に次々と見出し、命を吹き込み、人々に発信し続けました。

彼の残した作品は、2万点以上にも及びます。内藤ルネは時代も性別も超えて乙女ゴコロを魅了するマルチ・クリエイターであり、日本のガールズポップカルチャーを開拓・確立させたことから、「Roots of Kawaii」とも称されています。近年では展覧会の開催、航空会社Peach Aviationの機体ラッピング、NHKにてドキュメンタリー番組が放送されるなど、再び脚光を浴びています。

「Kawaii文化の生みの親」、"Roots of Kawaii"と称される内藤ルネが1960年、圧倒的な人気のファッション誌「ジュニアそいゆ」の表紙として描いた作品。小顔にデフォルメされた大きな瞳の美少女画は、現在の少女コミック画のルーツとも言われています。日本において最も高貴な色として扱われる紫でトリミングすることで、その美しさをより引き立たせ、女性を中心とした国内外のシニア～子供まで、広く受け入れられる画となりました。」



©R.S.H/RUNE



ゾーン3：世界で最初のエコバック、「ふるしき」の魔法 ふるしきインスタレーション

フランスではプラスチック製のレジ袋をすでに禁止しています。プラスチックゴミが海洋で細かく砕かれたマイクロプラスチックの問題に対する関心が高まっている中、FUROSHIKI PARISでは、世界最初の「エコバック」とも言えるふるしきを新たに提案しました。

私たちが日々の生活の中で持ち運ぶものは、形も大きさもさまざまで、それらをどう要領よく運搬するか、常に頭を悩ませています。この問題に対して、現代の私たちは袋や鞆を駆使して対処していますが、歴史を振り返れば、人類は世界中のあらゆる場所で「1枚の大きな布で包む」文化を発展させてきました。

ふるしきの100の使い方を展示し、代替品としてのふるしきの使用を提案しました。使ったら捨てることが日常化してしまった中で、たった一枚の布が様々な日常の用途に役立ち、生活に喜びを与え、季節に彩りを添え、贈り物に気持ちが宿ります。ふるしきは、使うことで人生の物語が増える魔法の布なのです。

ゾーン4：ふろしき体験コーナー

ふろしきインスタレーションの最後に、大きなテーブルを囲み、ワインボトルやバゲットなどをお好みのふろしきで包む体験コーナーを設けました。タブレットで紹介したほか、特別協力企業の協力を得て、ふろしきの包み方を説明しました。



「ふるしき」に託した未来

2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催され、次の2024年はパリというメッセージを伝えるため、安倍晋三首相および森喜朗元首相、さらに国際オリンピック委員会 (IOC) のバッハ会長と国際パラリンピック委員会 (IPC) のパーソンズ会長、東京2020パラリンピック競技大会に向けての国際パラリンピック委員会特別親善大使の香取慎吾氏にも、ふるしきのデザインをお願いしました。

環境を今の時代の大きなテーマとして考えていく必要があります。新しい技術で環境問題に対応することも大事ですが、古来の物やいにしへの知恵も活用しながら未来を創造していくことも大切ではないでしょうか。ふるしきはバケットでもワインでも包める実用的かつ芸術的なものです。今回の「FUROSHIKI PARIS」で、ふるしきがパリから世界に広がってほしいと願っています。



Shinzo Abe 安倍晋三

内閣総理大臣



Yoshiro Mori 森喜朗

元内閣総理大臣 風呂敷プロジェクト実行委員会名誉顧問



Thomas Bach トーマス・バッハ

国際オリンピック委員会 (IOC) 会長



Andrew Parsons アンドリュー・パーソンズ

国際パラリンピック委員会(IPC)会長



Shingo Katori 香取慎吾

Saison 4 Saison 4



©2018 SHINGO KATORI

1977年1月31日神奈川県生まれ。1991年のCDデビュー以来、歌手、俳優、タレント、司会としてマルチで活動。タレント活動とともに、画集の出版、オブジェ制作などアーティストとしても活動している。2017年からは、現代アーティストとして本格始動。2017年日本財団『ミュージアム・オブ・トゥギャザー』に「イソゲマダマニアウ」「火のトリ」の2作品を出展。同年、カルティエ『TANK100』では、「タンク」からインスピレーションを受けて制作した2つのオリジナル作品「時間が足りない:need more time」と「百年のfuu」出展する。2018年3月には香港政府観光局の招聘により香港島セントラルにストリートアート『大きなお口の龍の子(大口龍仔)』を完成させる。2018年9月に初個展「NAKAMA des ARTS」をパリ・ルーブル美術館で開催。

「日本の四季。子供の頃の私は、ただ暑いなあ、寒いなあ、としか感じていなかった。生きる時を重ねるにつれて季節によって異なる景色、食、花、気分、心を変化させてくれる四季が、私の時間を穏やかに進行させてくれていると感じられるようになりました。しかし今、日本の四季が温暖化や気候変動により乱れているように感じます。その乱れを、世界で最初のエコバッグ『風呂敷』に、結び直して欲しいという思いを込めて描いた『saison4』です。」